
【イベント報告】

『意味の論理学』出版 50 周年記念特別企画「『意味の論理学』を本質変形する」

小倉 拓也

DG-Lab は、2019 年 12 月 7 日（土）、慶應義塾大学において、『意味の論理学』出版 50 周年記念特別企画として「『意味の論理学』を本質変形する」を開催した。DG-Lab と、秋田大学教育文化学部地域文化学科国際文化講座小倉拓也研究室の共催によるものである。この特別企画の記録は、その全登壇者の原稿が、一部改稿の上『hyphen』本号に特集として収録されている。各登壇者の発表内容の詳細についてはそれをお読みいただくことにし、以下ではごく簡単な報告を行うことにしたい。

本イベントは、タイトルのとおり、ドゥルーズの『意味の論理学』（1969 年）の刊行 50 年を契機に企画されたものである。DG-Lab のメンバーである小倉拓也、内藤慧氏、平田公威氏に加え、江川隆男氏に講演者として登壇いただいた。イベント当日、東京はあいにくの雨で、また、事前準備の段階で会場に変更が生じたり、ポスターの作成が遅れたりしたこともあって、どれだけの来場者がくるのか心配していた。しかし、13 時の開始段階で会場はほぼ満席、開始後まもなく超満員となった。参加者は、北は秋田から南は沖縄にまでわたった。

イベントは、小倉による「導入——『意味の論理学』の地図作成」からはじまった。小倉の導入は、『意味の論理学』のドゥルーズの仕事における位置づけと、書物の内的構成についての図式化を行うものであり、続く発表、講演、質疑をとおして、タイトルのとおり変形され、捻じ曲げられることが意図されたものだった。

次いで、内藤慧氏の研究発表「海の原理とストア派——『意味の論理学』動的発生論のストア派的読み換え」が行われた。これは、「海の原理」といういまだ主題化されたことがないように思われる概念に注目することで、主に精神分析の理論装置を用いて展開される動的発生論のなかに、ストア派の哲学の重要性を、その混合概念の検討や、さらにアントナン・アルトーに紐づけられる「湿の原理」との関係の検討などをとおして見いだす、きわめて意欲的なものだった。

続いて行われたのが、平田公威氏の研究発表「動詞的になるこ

と——『意味の論理学』におけるアイオンの文法論的考察」である。この発表は、第 22 セリーでアルコホリズムなどに関連づけられて言及される「複合過去」の特異な時間性を、ドゥルーズのひそかな元ネタであるギュスタブ・ギヨームの時間発生論を導き、「第三の現在のアイオン」として、つまり現在を徹底的に逃れる空虚な形式がそれにもかかわらず現在に場を持つこととして、説得力ある仕方で明らかにするものだった。

最後に、江川隆男氏の講演「〈批判／臨床〉の並行論について——『意味の論理学』における一義性の思考」が行われた。先行する導入と研究発表が、形式的な図式化につとめるものであったり、特定の概念をめぐるテクニカルな議論であったりしたのに対して、江川氏の講演は『意味の論理学』のど真ん中を射抜くものだった。氏は、ドゥルーズの哲学が、否定性の優位に対する肯定の哲学であり、それが差異の哲学であるということを力強く確認するとともに、それをいかなる実体も関係も退ける苛烈な「〈存在の仕方〉主義」として論じた。ぜひとも『hyphen』本号に収録された論文を読みたい。ちなみに、私が最も衝撃を受けたのは、スピノザ的な必然性をめぐる私の質問に対する応答で、この〈存在の仕方〉主義が、徹底的な無-実体、無-様相の哲学であり、そこでは、ドゥルーズにおいて可能性を消尽するものとして肯定的に言及されるスピノザ的な必然性すらも消尽されると論じられたことである。江川氏の議論からは、個人的にも、集団としても、大きな力を得た。

導入に対しても研究発表に対しても、活発な質疑応答が行われ、講演後の全体討議ではとくに熱のこもった議論が交わされた。参加者にも恵まれたイベントだった。また、会場となった慶應義塾大学の教室は、DG-Lab の貴重な東京勢である内藤氏の尽力と、樋笠勝士氏の協力で利用することができた。ご協力くださった方々に、あらためて感謝申し上げたい。DG-Lab は、次に『アンチ・オイディプス』（1972 年）のイベントを企画しているが、果たしてどうなるか……。